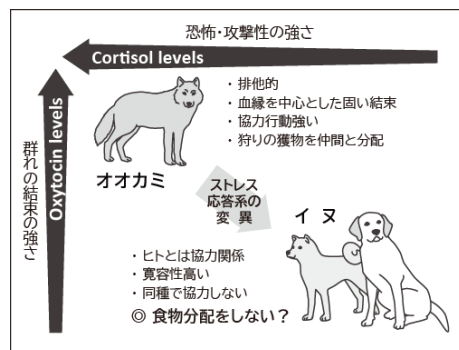


永澤 美保・菊水 健史（動物応用科学科 介在動物学研究室）

研究の背景

ヒトは互いに**利他行動**を取り合うことで協力社会を築いています。このような関係はヒト特有のものだと考えられてきましたが、現在ではチンパンジーも同種他個体に利他的にふるまうことがわかっています。**イヌは家畜化の過程でヒトに似た社会的認知能力を身につけ、ヒトと協力的な関係を構築してきたといわれています。**しかし群れ内で極めて協力的な行動を示すオオカミに比べて、**イヌは同種に対して協力行動を示さない**という報告もあります。

そこで本プロジェクトでは、**利他行動がイヌ同種間でもみられるかどうか**を明らかにすることを目的にイヌの食物分配について調べます。



利他行動とは直接的には他者にしか利益をもたらさない行動をいいます。食物分配も利他行動の一つです。

アプローチ

【対象】一般家庭で飼育されている同居犬2頭

【方法】イヌ同士が食物分配行動を示すかを調べる

- ① 分けられる/分けられない餌を呈示した際の行動観察
- ② ①の結果と下記の関連を調査
 - ・採尿し、社会行動に関与する尿中ホルモン濃度を測定
 - ・個体情報、飼育環境、気質アンケート調査



2頭で餌を分けられる条件



2頭で餌を分けられない条件

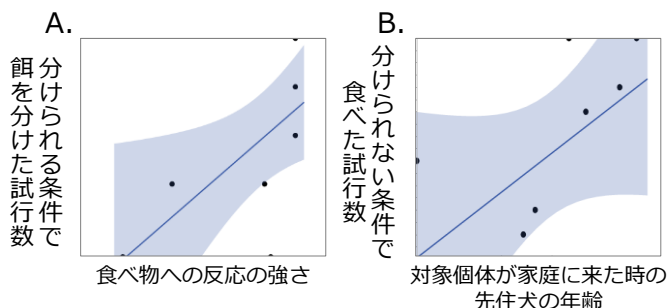
期待される結果

本プロジェクトは、介在動物学研究室で取り組んでいる「**集団形成・維持とその要因**」を明らかにする研究課題の一環として実施されています。構成個体のどのような特性や環境条件の下で集団が形成・維持されるのかを明らかにするために、協力や寛容性の指標の一つとして食物分配行動を調べます。この研究は、イヌそのものへの理解を深めると同時に、**最古の家畜でありヒトと極めて親密な関係を結ぶことができるイヌの特性を通して、ヒト社会を理解**することを目的としています。

参加される方は、行動実験の実施、行動観察の方法、ホルモン測定法、統計解析方法を身につけることができます。

現状とこれから

現在、イヌの気質や性別、イヌがどのようなイヌと暮らしてきたかが分配行動に影響している可能性が示されています。また、大学院生が行っている同居犬同士の社会的参照行動の研究結果とも関連が見出されつつあります。



A. 食べ物への反応が強いほうが、同居犬と餌を分ける傾向、B. 先住犬の年齢が高いほど餌を独占する傾向がみられます。また、オスのほうが餌を独占する傾向もあります。